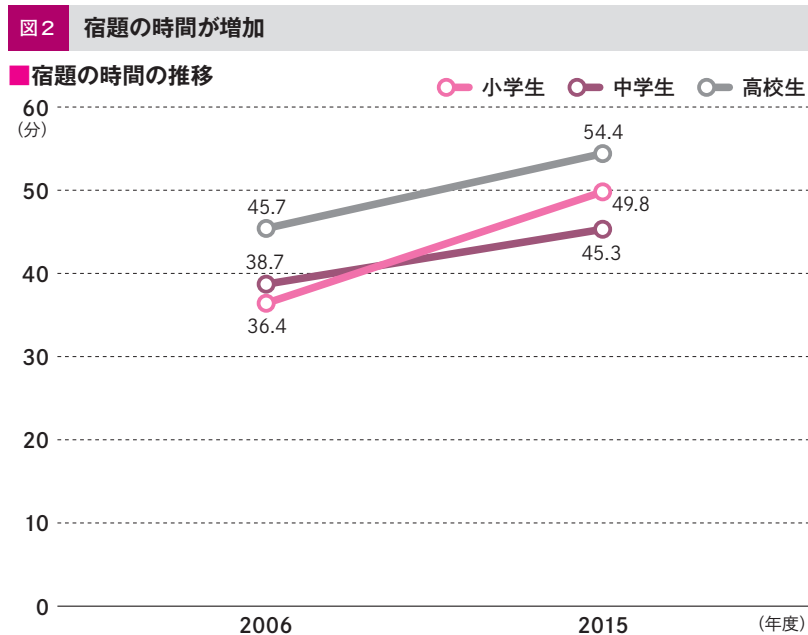
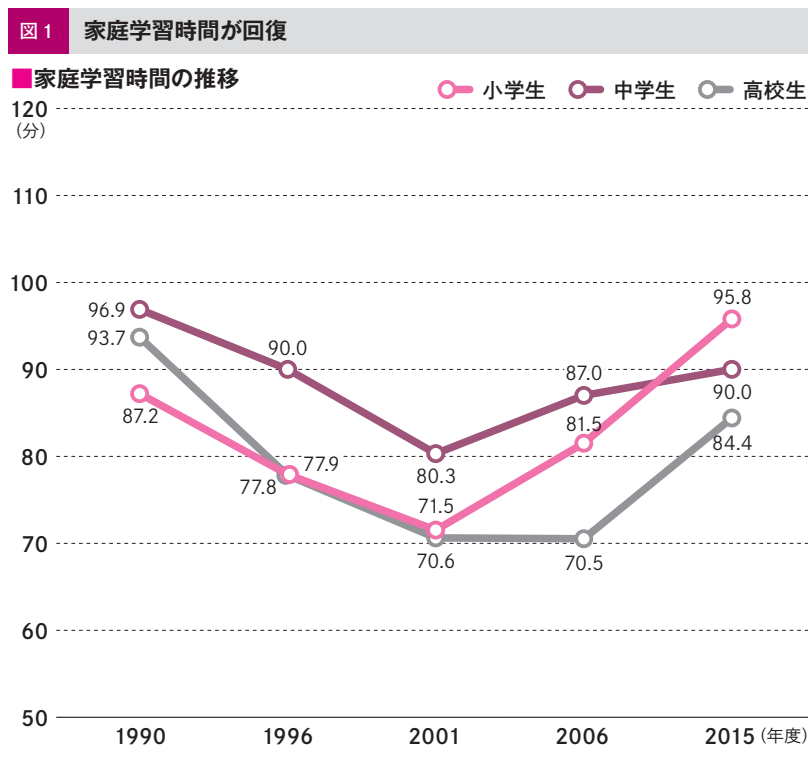


現状把握

調査結果が映し出す25年間の学習に関する意識・実態の変容

「学習基本調査」は、第1回調査を実施した1990年から25年間にわたり、児童・生徒や学校現場の変容を見つめてきた。第1回調査では、子どもの数が現在の1.6倍いる中で、競争のプレッシャーに苦しむ子どもたちがクローズアップされ、第2回調査（96年）では、学ぶ目的が見えにくい中で、従来の学習を維持しようとする姿が見られた。その5年後の第3回調査（2001年）では、学習時間の著しい減少や学習意欲の低下から「学習離れ」がキーワードとして指摘され、第4回調査（06年）では、前回に比べて回復傾向にあったものの、学力や学習習慣の格差の進展が話題となった。この度、



相次ぐ教育改革を受けて、子どもものの学びはどう変わったか

ベネッセ教育総合研究所の「学習基本調査」は、1990年から子どもものの姿を見つめてきたが、今回の結果では、家庭学習時間や学習態度の大幅な改善が特に注目されている。主要な調査結果を紹介する。

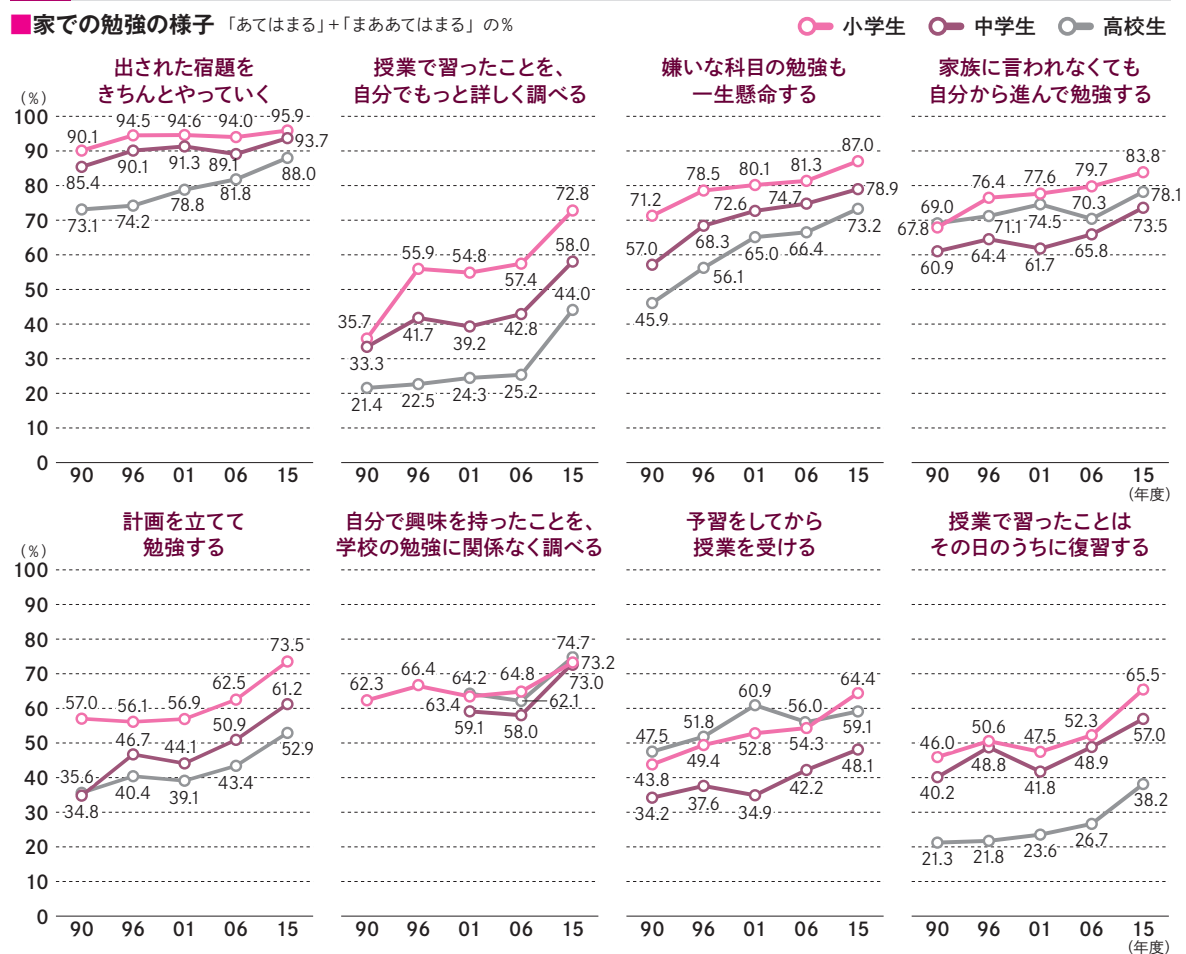
公表された第5回の調査結果は、子どもたちのどのような姿を映し出しているのだろうか。

家庭学習時間が増加し 学習態度や意欲も軒並み改善

最も注目されるのは、小・中・高ともに家庭学習時間が増加していることだ(図1)。特に、小学生と高校生は、前回調査を15ポイント近く上回った。それに比べて伸び率は低いものの、中学生も同様に上昇した。その要因の1つとして考えられるのは、宿題の時間の増加だ(図2)。家庭学習時間の増加は、宿題に取り組む時間の増加でほぼ説明できる。

ただ、子どもたちは、必ずしも与えられた宿題をこなすだけの「受け身の姿勢」で家庭学習に取り組んでいるわけではないようだ。家庭学習の様子を見ると(図3)、「出された宿題をきちんとやっていく」に加え、「授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる」ことを、学校の勉強に関係なく調べ「授業で習ったことはその日の

図3 望ましい学習態度が強化されている



「第5回 学習基本調査」概要

- 調査テーマ 小学生・中学生・高校生の学習に関する意識・実態調査
- 調査方法 学校通しによる自記式質問紙調査
- 調査時期 第1回1990年 第2回1996年 第3回2001年 第4回2006年 第5回2015年
- 調査対象 小学5年生・中学2年生…全国3地域(大都市[東京23区内]、地方都市[四国の県庁所在地]、郡部[東北地方])
高校2年生(普通科)…全国4地域(大都市[東京23区内]、および東北・四国・九州地方の都市部と郡部)
- 有効回収数 小学5年生(1990年2,578人、1996年2,665人、2001年2,402人、2006年2,726人、2015年2,601人)
中学2年生(1990年2,544人、1996年2,755人、2001年2,503人、2006年2,371人、2015年2,699人)
高校2年生(1990年2,005人、1996年2,615人、2001年3,808人、2006年4,464人、2015年4,426人)

調査結果の詳細は、下記サイトをご覧ください。

<http://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=4801>

うちに復習する」といった主体的な学習態度に深く関連する項目の肯定率が上昇し、望ましい学習態度が強化されていることが明らかになった。

教科の好き嫌いに対する回答からも、学習態度や学習意欲の改善が垣間見える。小・中・高ともに、ほぼ全教科で、「好き」と答える子どもの割合は増加した(図4)。特に、今回の調査では、算数・数学が「好き」という割合が大きく上昇した。強いて言えば、唯一、中学生の理科が低下していることは課題と言える。

学習の悩みも変化している。「分かりやすい授業にしてほしい」の肯定率が小・中・高ともに低下したのは、子どもにとって分かりやすい授業が増えている表れだろう(図5)。一方で、「上手な勉強の仕方が分からない」の割合は、中・高で依然として高く、いかにして自分に合った勉強方法を身につけさせるかが課題だ。

能動的な学習活動に対して 前向きな姿勢が目立つ

学校での授業や学習に対する好き嫌いにしても、変化が見られる。

小・中・高とも、「個人で何かを考えたたり調べたりする授業」「いろいろな人に話を聞きに行ったりする授業や調査」「考えたり調べたりしたことをいろいろ工夫して発表する授業」など、能動的な学習活動に関する項目で「好き」の割合が大幅に増加していた(図6)。

現在、各学校段階において、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業が推進されているが、児童・生徒からはおおむね前向きに受け止められているようだ。一方で、「先生が黒板を使いながら教える授業」の肯定率も依然として高い水準にあり、従来の指導が決して否定されているわけではないことにも注目したい。

課題はあるものの、指導改善の努力を積み重ねてきた教師にとって、大きな励みとなる結果と言えるだろう。ただ、現場の教師の実感値とは異なる部分もあるかもしれない。今回の結果を現場の実態も踏まえて、児童・生徒のさらなる成長と教師の指導力向上に生かすためには、どのような視点が求められるのだろうか。P.8からの各学校段階の教師による座談会では、その点について考えていく。

図4 算数・数学の「好き」が向上

教科の好き嫌い 「とても好き」+「まあ好き」の%

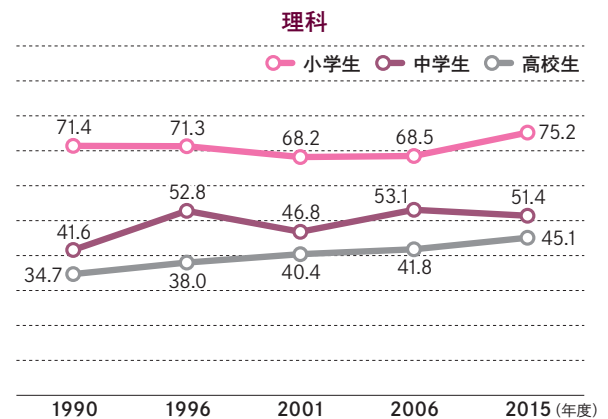
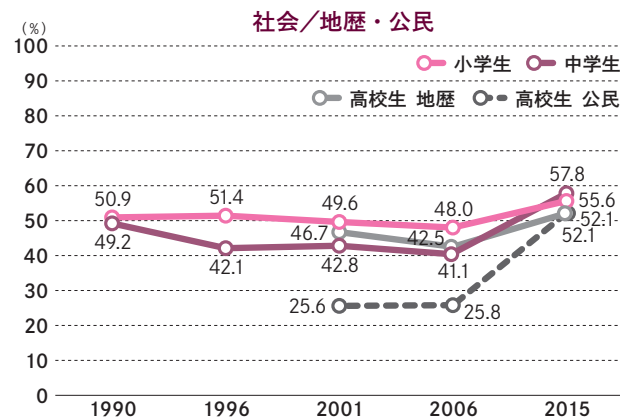
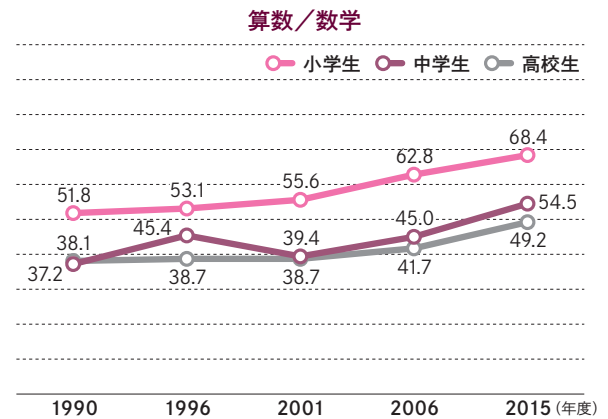
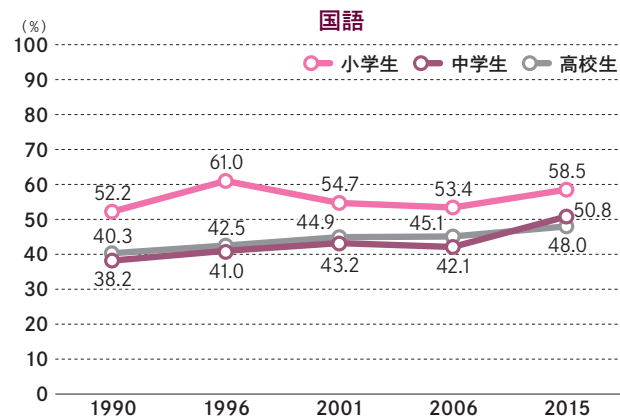


図5 劇的に変わっている学習観

■ 学習の悩み・学習観

○ 小学生 ○ 中学生 ○ 高校生

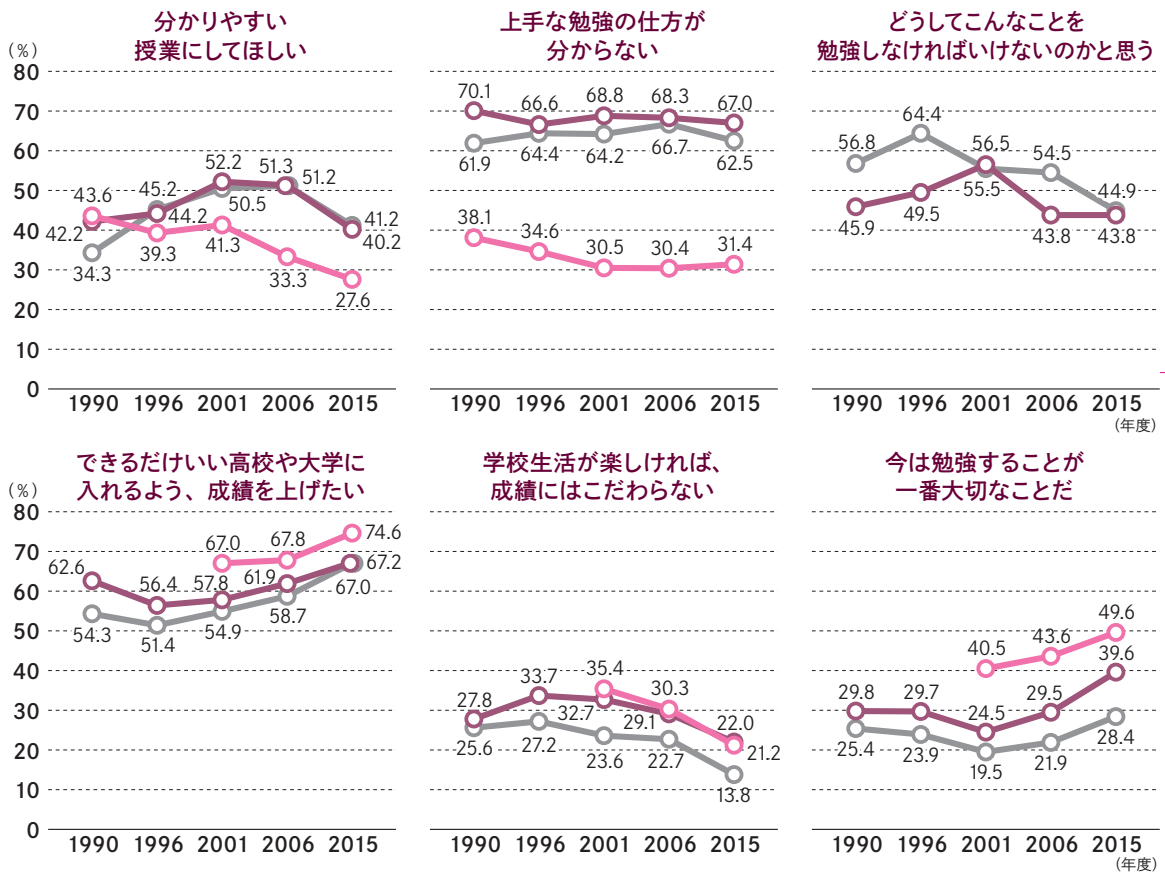


図6 能動的な学習活動に関する項目の評価がおおむねアップ

■ 授業で好きな学習方法 「とても好き」+「好き」の%

■ 2001 ■ 2006 ■ 2015 (年度)

